

中院通茂『未来記雨中吟聞書』翻刻 (一)

井原英恵・大山和哉
熊谷和美・小林雄一
山田咲生子・中村健史

忌避すべき風体の歌を収め、初学者の誠めとした歌書『未来記』『雨中吟』(藤原定家仮託)には、中世後期から近世初期にかけていくつかの古注釈が存する。しかしながら、宗祇『遠情抄』(日本歌学大系別巻八『和歌部類』、京都大学蔵大惣本稀書集成第十巻『和歌七部之抄』、後陽成天皇『未来記雨中吟御抄』(列聖全集御撰集一)などを別にすれば、大半はいまだ翻刻さえ行われていない。

本稿はその欠をいささかなりとも補うべく、「京都大学」三條西公条講未来記雨中吟聞書 解題と翻刻」(二六号、二〇〇六年九月)及び「遠情抄(宗祇未来記并雨中吟抄) 解題と翻刻」(二八号、二〇〇七年)の二篇に続いて、中院通茂『未来記雨中吟聞書』(京都大学中院文庫蔵)の紹介を試みたものである。『院中番衆所日記』などによれば、通茂は元禄

十五年十一月十七日、二十一日、二十六日、十二月十二日、十六日の五日間にわたって、靈元院に『未来記』『雨中吟』を講じた。本書はそれに先だつ十一月十一日、二十日、二十二日の三回、おそらくは予行演習を兼ねた意味で、門人たちに行つた講釈の手控えと推測される(門人松井幸隆による聞書も中院文庫に『未来記雨中吟聞書草』として所蔵される。請求記号VI16)。その内容は『未来記』『雨中吟』の古注釈のなかでも群を抜いて詳細なものであり、靈元院歌壇を中心とする近世堂上歌学のありかたを考える上でも高い価値を持つと思われる。

なお、翻刻は教次にわかつて掲載し、右に述べたような仙洞講釈、『未来記雨中吟聞書草』との関係についても、次稿を期すこととしたい。

〈書誌〉

京都大学附属図書館中院文庫所蔵（請求記号VI160）。縦一三・八cm×横一〇・四cm。双葉列帖装。本文料紙は薄手の楮紙、薄青色紙表紙。表紙に直接「未来記雨中吟」と題を墨書する。帙題「未来記雨中吟聞書」。奥書等はなし。冒頭「未来記」という内題の下に、朱で「元禄五十一十一ノ洞中御講十一十七始」と記される。書写者は不明であるが、通茂の筆跡に似る。全丁の画像がインターネット上で公開されている（京都大学電子図書館貴重資料画像）。

〈作者〉

中院通勝。寛永八年四月十三日（一六三二年）生。父は権大納言通純、母は権大納言高倉永慶の女（法号桂光院）。弟に野宮定縁。幼名安居丸。一字名「水」「老」。

慶安元年正月五日、五歳で正四位下に叙せられ、父の死によって承応二年に家督を相続した。侍従、右近衛権少将、左近衛権中将などを経て、明暦元年正月、参議補任。同年六月、従三位。権中納言より権大納言に至り、寛文十年、四十歳の折に官職を辞す。延宝二年より翌三年まで武家伝奏に補され、元禄十七年、内大臣。翌宝永二年には従一位に陞った。宝永七年二月二十一日（一七三〇年）薨。享年八十。法号溪雲院。墓は京都廬山寺にある。室は小笠原政

信女。子に中院通躬、野宮定基、久世通夏、円恕。

祖父通村、父通純より和歌を学び、父の没後は後水尾院に師事した。寛文四年には院より古今伝授を受け、明正天皇、後光明天皇、後西天皇、靈元天皇、東山天皇の五代に歴仕。堂上歌壇の著宿として嗣子中院通躬、次男野宮定基、三男久世通夏、日野資茂らに古今伝授を行い、靈元院の百首歌にも合点を施すなどしている。元禄十六年九月、歌道鍛錬をもつて幕府より二百石を増された。門人に松井幸隆、三輪希賢など。また徳川光圀とも親交があった。

家集に『老槐和歌集』があり、『新三玉和歌集類題』『二槐和歌集類題』等の類題集にもその作品が収められる。歌学書に『詠歌大概聞書』『古今集聞書』『源氏物語講釈』など多数。『溪雲問答』は門人松井幸隆の聞書で、通茂の歌学説のほか、当時の歌壇の状況をよく伝える好資料である。また中院流の書を伝える能筆家としても知られる。

〈凡例〉

- ・読者の便を考慮して、『未来記』『雨中吟』本文には歌番号を付し、引用文に適宜「」を加えるなどした。
- ・字体は通行のものに統一した。
- ・見消ちは「某」、補入された文字は（某）のかたちであらわした。また朱字はゴシック体で翻刻した。

此書を未来記と号する事は、後生の輩哥を詠ずる事、ふるき姿の長高く優にして正しく、又幽玄に哀ふかきさまを深く味ひしらざる人は、さ様の筋をば疎に思ひて只新敷よみ出んとする故に、やゝもすれば人ほがに事過、よのつねのつゞきうつくしき詞をばふるめかしきやうに思ひ、つゞきあしく切々なる詞をば詞つよきはきとしたる様におぼえてつゞけ、又近き世の人の哥どもの心詞をも我新しく思えたるやうにとりつゞけ、又は近代の哥をも憚なく本哥に用てよみ出などする事、是皆あたらしくと深く案ずる人のかへりてふみたがへる所也。此道正風廃れ行ては必此堺に可赴事をかゞみて、末学後生の為、京極黄門如此よみ出ていましめとし給へるなるべし。いかにも／＼ふかく吟じよく味ひて此堺に入ざるやうに心をかくべき事也。

前前ノ和歌得業生和歌ヲウケテシユルヲシ柿本ノノ貫躬ノノツツ

儒者秀才の時は文章得業生也。此作者作名也。此五十首の哥の心をも此作者にてよく可心得也。和歌得業生、心得ざる官也。本儒者の官なるを和哥の人の用るにて心(を)得べき也。得業生、和哥に応ぜず。又柿本とあら

ば人丸とあらんかと思へば貫とあり。貫とあらばなどにもやと思ひ侍れば又躬とあり。さらにつゞかず。あらぬかたにちがひ侍る事、未来記の哥の体をあらはしたるなるべし。

此哥ども風体あしきに付て学者の翫事無用なる事と思ひしやらん、宗祇抄をはじめ諸抄ともに姿、かゝり、詞のあしき事ばかりを註して、百人一首、詠哥大概などのやうにくはしく註したる抄物みえず。今これを思ふに、百人一首は人々の秀逸をあげて和哥の骨髓なれば、凡眼及がたきゆへ初学(人の)の為には助となる事とをし。詠哥大概は心、詞、風体の事をあげたづね、さまぐの教をたれて哥道に入べきやうを書をかけたれども、正風体幽玄の趣は今の学者の心に人がたくみえて、心をうつし古風に深掘翫する人稀也。此未来記は当時の学者の病多は此中にあり。却而したしかるべきやうにおもはるゝ也。此哥どもを親みしたゝめてあしき所を心得たる上に、詠哥大概の哥に心を付なば、よき風体と知事心におつべし。其上に又此歌どもをみては深此風体のよろしからざる趣あきらかなるべし。そのうへにては詠哥大概の歌の体に心うつり、信も出来、定家卿の教も心腑に入べき也。十竹一依之及ばずながも古抄に沙汰なき哥の心を患推(覽慮)をめぐらし、古人の手を付残し

たる難をも加へ、御所存述給ひしなり。

春

1 年の内に春はきにけり一とせに二度かすむよもの山の
は

「年の内に春はきにけり一とせをこそとやいはんことし
とやいはむ」

此哥古今の巻頭なるうへ、詠哥大概にも「雖二句更不
可詠之」といへり。しかるに三句までこれをとるのみな
らず、句の置所もかはらず、以年内立春詠年内立春事、
彼是不可然」云々。尤此通なるべし。此哥上句古今哥な
ればあしかるべき様なし。下句さしてにくげなる事なし。
然らば本哥の詞取過^せなるにより、此第一に入たるなるべ
し。さて本哥の取様は、

詠歌大概云「五句之中及三句者頗過分無珍氣、二句之上
三四字免之、猶案之以同事詠古歌詞頗無念歎^{以能聲}、以四
季歌詠恋雜哥、以恋雜哥詠四季哥、如此之時無取古哥之
難歎」。

毎月抄「本哥をとる様は花の哥をやがて花によみ、月を
やがて月によむ事は達者のわざなるべし。春の哥をば秋

冬などによみかへ、恋哥をば雜や季の哥などにて、しか
もその哥をとれ^{ゆる}よときこゆるやうによみなすべきにて
候。本哥の詞をあまりにおほくとる事は、あるまじき事
にて候。其中に詮とおぼゆる詞を二ばかりとりて、今の
哥の上下の句にわかちをくべきにや」云々。此兩書之旨
可為同意也。以恋雜哥詠四季哥とは、古今に

「名取河瀬々の埋木あらはればいかにせんとかあひみそ
めけん」と云をとりて、

「名取河春の日かずはあらはれて花にぞしづむ瀬々の埋
木」

如此とれるをいへり。恋哥を春に用、瀬々埋木を下にわ
かち置、あらはればといへるをあらはれてとかへてつか
ひたる也。又以同事詠といへるは、後撰ひがきの姫の哥
に

「年ふれば我くろ髪も白川のみづはくむまで老にける
哉」と云にて、

「年ふればわが黒髪も白糸のよるは仏の名をとなへつ
ゝ」定家

是は一二句置所かはらず、以述懷哥詠述懷哥也。されど
も白川を白糸といへるは、我くろ髪もしらとうけたるは
同事なれども、白糸といへるは定家卿の力入たる所あり
て、白の字、我物としたる所みゆる也。そのうへ年ふれ

ばの五文字、一首の冠として一首をおほふ所ありて、一首のひつくりと成たる也。本哥はみづはくむまで老にける哉と老の字ある故に、五文字下へおほひやうよはくきこゆる也。定家哥は、下句老の所作計をいへるゆへ、年ふればの五文字一首へかゝりて、一首のひつくりと成たるやうに、力づよくおもくきこゆる也。詩に奪胎換骨といへるやうに、同じ五文字の詞ながら、骨をとりかへ真氣の人かはりたる所あり。如此とり用る事、誠に達者のわざなるべし。今此哥は上三句本哥をそのまま用て作者の力入たる所なし。及三句者頗過分無珍氣といへる所也。さて二たびかすむよもの山のはも上の二句より思ひつきて、上句より出たる趣向のやうにきこゆる也。これみな本哥にすがりたる取やう也。初心の人はかやうに本哥を力にし、本哥にすがりてはとる事成がたきゆへ、せめて句の置所をかへ、四季を恋雜にかへてとれとをしへられたるなるべし。たとへていはゞ「年の内に春はきにけり」の哥は元方哥を心柱にたて、それよりたて出したるとみゆる也。定家卿の白糸の哥は、ひがきの姫女が哥を切くだきて椽かんキにも柀かんキにもつかひたるやう也。此哥ばかりにては、切くだきて用どころみえがたし。それは此名とり河にてみゆる也。

がて恋の哥に、
 文治五 堀川百首(題にて) 不逢恋 いかにせんのかにせんか
 「名とり河いかにせんともまたしらずおもへば人をうらみける哉」
 続古 内大臣家百首 逮懐建保 あらはれての詞をとり
 「あらはれて袖のうへゆく名取河今はわが身のせくかたもなし」
 建保名所百首
 「名とり河心にくたす埋木のことほりしらぬ袖のうへかな」
 貞永関白家百首 不逢恋 これは心を散て調を不用也
 「名とり河心のはんことのはもしらぬあふせはわたりかねつゝ」
 院句題五十首 寄木恋 これは名取河をけりてせの埋木にてよめり
 「せく袖にせゞの埋木あらはれて又こす波にくちやはてなん」
 水無瀬殿恋十五首 河辺恋 わたれはつらしはつる様のためしの
 「名とり河せゞの埋木あらはれて又こす波に瀬々のむもれ木」
 贈答哥
 「せきわびぬ今はたおなじ名とり河あらははれてぬせゞのむもれ木」

「名取河」の哥一首を八度に用てさまぐにつかひなしたる作意、凡慮の及ぶべき所にあらず。か様の事はたれもなるまじく、古今にあるまじく思はるゝに、近代秀歌に俊頼哥をさまぐ褒美しありて中に、

「うかりける人をはつせの山おろしよはげしかれとは祈らぬものを」

これは心ふかく、詞心にまかせてまねぶともいひつゞけがたく、誠に及まじき姿也」云々。定家も此哥は及まじく思はれたりとみえたり。又忠岑の「有明のつれなくみえし」の哥をば「あはれ是様の哥を一首よみて此世の思ひにせばや」と申されし。いかばかり好ましくうら山しく思はれけるにぞ。これにて哥の道の無尽なる所を思べし。

或抄異傳「一とせに二度かすむ、一二といへるも好ましからず侍なるべし」云々。

されども一二とつゞきたる古哥あまたあれば、咎にはあるまじき也。

「声たえずなげや鶯一とせに二たびとだにくべき春かは」

「色かはる秋の菊をば一とせに二たびにほふ花かとぞみる」

「一とせに二たびさかぬ花なればむべちることを人はい

ひけり」

「渡守はや舟かくせ一とせに二たびきますきみならなくに」

近代は此詞多はみえざる也。

2 うち出る涙のこほりときは山声に色あるうぐひすの谷

「雪のうちに春はきにけり鶯のこほれるなみだ今やとく

らん」

「涙のこほりときは山とつゞけたる秀句、一段とあしくきゝにくき也。又鶯の谷は谷の鶯をめぐらしくせんとするにや、人ほがなるべし。声に色あるもいひおほせても

おほえず。鶯の谷、これらや詞の未來記に侍らん。惣じて詞の未來記、心の未來記侍べし。よく／＼分別すべき也」云々。

声に色あるは声に春の色あるの心なるべき也。誠にいひおほせてもきこえぬ也。こゑにといひ、色あるといへる、

ふときゝたる所面白やうなる詞にて、よく吟ずればいやしくきゝにくまいやなる詞也。涙の氷ときは山、か様にもとめたる秀句は耳にたちてきゝにくき故、大きに嫌事

也。

さて打出るといへるは鶯の初音の事ながら、下に谷といひ、氷とあるをみれば「谷風にとくる氷の隙」ことに「の哥にて、うち出る波とうけてなみだの氷とつゞけたる也。されども涙の氷といひては波とうけたりとはきこえず。殊常磐山に波は相応せざる也。又常盤山こゑとつゞきたるも、ふときく所何の声かと思はるゝ也。

毎月抄云、「大かた哥にうけられぬ物は秀句にて候。秀句も自然に何となくよみ出けるは、さても有ぬべし。いかゞせんとたしなみよめる秀句が、きはめて見苦敷みざめする事にて侍也」云々。

「思草葉末にむすぶ白露のたま／＼きては手にもたまらず」

この秀句自然に出てかるくうつくしくきこゆる也。

「白雪の春はかさねて立田山をぐらのみねに花にほふらし」

「時わかぬ波さへ色に泉川ははその柱にあらし吹らし」

「秋のよの月やをじまの天の原明がたちかきあまのつり舟」

此等人新古今随分何となき秀句なれども、「思草」にくらべては猶耳にさはる所あるやう也。「思草」は此等よりかもろくまろらかにうつくしき也。これら吟じくらべ

て、涙の氷（ときは山の）きたなきよく知らるゝ也。これにて毎月抄のうけられぬとあるを知べきなり。

3 たが春と岩もとすげの子日してひくまのゝべの松のひとしほ

御抄「此哥一句づゝみ侍れば常の詞にてさらにとがなく侍るを、只秀句にむすぶゝれてつゞけやうのあしきゆへに殊外（に）なる物也」云々。

一首の心は、たが春といふべきぞ、春と云は今日引まの野べの子日の松（の春）にてこそあれ、といへる心にや。抄に無心所着とあれども、左様にてはあるまじき也。此哥ども趣向は一すちありて、或いひおほせず、或趣向入ほがにてきこえぬ哥どもなるべし。たが春といはんとうけ、皆のねの日とうけんため、子日の用にもたゝざる岩もと皆とり出せる事、不可然。此哥句ごとの秀句一々きゝにくし。

「立別いなばの山の峰に生る松としきかば今かへりこん」

此哥を俊成卿、「あまりくさり過てよろしからず侍を、今かへりこんといひながしたる所最幽玄也」とぞ賞せら

れし也。此哥は下まで力を入れてくさりつゞけたるなり。さればつまりていやしく聞所なき也。

4 消がての白雪あをき若草にをみの衣をきたる御狩場

小忌衣は豊明、大嘗会などの神事に着用する也。地の白きに青摺したる物なれば、消がての雪に若草のもえ出たるは青摺のやうなれば、小忌の衣に見なして小忌の衣をきたるといへり。惣じてあをきと云詞をば嫌うへ、白雪あをきといへる以外不宜也。又消がての白雪といへる白の字さして用なし。消がての雪とつゞけたるやうにはなく、きゝにくし。消がての雪まに青きといひても事は足ぬべけれど、青木の若草と云に取合て、白雪と置てふしにしたる也。その作意様がきゝにくし也。又きたる御狩場は小忌衣を狩場のきたると云にや。異様なるみても也。小忌衣とみゆるといひてはやすらか也。さいひてはぬるき故、きたるとみたてゝいひたるなるべし。きたる御狩場、詞つよきやうにはあれどもいやしくきたなき詞也。つよき詞を好人は、いやしきをみずしてつよき詞を用ひたがる也。それよりつよくつかひなれては連之、おぼえずかやうの詞をも常として次第に風体損じ行事也。よく

く心を付べし。

5 時しあれば暁かけて鶯のこゑする梅を人やおるらん

紙抄「侍人もこぬ物ゆへに鶯の鳴つる花を折てけるかな」といふ哥をとれり。本哥は優にやさしきさまなり。大略その心ながら、暁かけて人やおるらん、入過たる心也。五文字の時しあればも心ならず。時しもあれとこそ云べきを如此いへる、よろしからず」云々。

御抄「或抄に、「あか月かけて人やおるらん」とやらん侍る哥をとれる也。声する梅をも何となく彷彿也」云々。暁かけて人や折らん、類句等考られても此下句無所見。暁かけてといへる詞、鶯につゞきたる也。又暁かけて人やおるらんといへる心にや、きゝわきがたし。いづれにても人やおるらんといへる、何のためにおれる事やらん、そのゆへ聞えがたし。別毎月抄本哥を取事をいへるに、「余に幽にとりてその哥にてよめるともみえざらんは何の詮か待べき」とあり。是より覚えよらるれば、源氏物語手習の巻に、「こやにあかたてまつらせ給。下らうのあまのすこしわかきがあるめしいでゝ花をゝらすれば、かゝことがましく

もあはにほひくれば、

「袖ふれし人こそみえね花の香のそれかと匂ふ春のあけ
ぼの」

此心などにもあるべき也。これにては、暁かけて人やおるらん、きこゆるやう也。暁かけてに閑加をもたせてきこゆる也。されども心詞此所をとれりときこゆる所はなき也。

此心にしてみる時は、暁がたにちかくにほひくるにつけて人やおるらん、日比鶯の声したるむめを時ありて人やおるらん、忍て鶯のねぐらをしめてゐるやらんもしらで折かと、心もとなく思たる心などにてあるべき也。

但是まではなく、「待人も」の哥にておりてける哉と人やおるらんとかへ、待人もこぬを時しあればとし、鶯の鳴つるとあるに風景をそへて、暁かけてとよみける也。

6 桜花よもの山のは咲みちてふじのすがたに匂ふ白雲

御抄「桜花咲ぬる時はかづらきの山のすがたにかゝる白雲」此家隆卿の哥をおもふにや。桜花よよといふよ

り（祇抄同）、毎句のつゞき切々にしてさまも又事過たるなり。末代の哥はいかにも人ほがさま過侍るにこそ。

「こしの白根に春風ぞ吹」をおもひていへるにや。家隆卿は咲みちたる花を山のすがたにかゝる白雲とよめればこそ、誠殊勝に侍れ。これはすがたに匂ふべき事、いかにぞや侍り」云々。

詠歌大概「近代之人所詠出之心詞雖一句謹可除棄之」。

又近代秀歌「今の世にかたをならぶるともがら、たとへばよになくとも、昨日けふといふばかりにすいできたる哥は、一句もその人のよみたりしとみえん事をさらまほしく思ひ給へ侍る也」云々。

又順徳院百首、御製に、

「かひがねゆ山はのすがたもうづもれて雪のなかばにかゝる白雲」

雪のなかば、殊めづらしく候。山のすがた、建保の比ほひ、秀哥とてきこえ候めり」云々。

山のすがたをふじのすがたとかへたりとて、近代の哥をかせる咎はおなじかるべき也。ふじのすがたといへるは、満山花なれば雪とみえたるをふじのすがたといへるにや。家隆卿は花の雲なれば、山のすがたにかゝる白雲といへり。四方の山のは咲みちたればとて富士の姿とはみゆべからざる也。抄にもあるとをり、よもの山のは咲み

ちてと云句うつり切々也。さくら花よもといふも又つゞかざる也。ふじのすがたに句ふ白雲も、山のすがたにかゝるといへるつゞきのやうにはよくはきこえざる也。

7

吹わたる雲のかけはしと絶せずちるかよしの峰の桜木

御抄「吉野の峰より花のすきまなく散は雲の梯の如くなるよし。姿、かゝり優に侍れども、花のちるを雲の梯ととりなす事、余にぞきこえ侍。桜木ととまり侍もよろしからずとぞ。吹わたるも風なくては如何ぞや」。又或抄に、

「春のよの夢のうき橋と絶して峰にわかるゝ横雲のそら」

「うつり行雲にあらしの声す也ちるかまさきのかづらき此両首をとれり」と云々。

御説「此両首の上句下句の詞、句法をとり合て一首とし、物をかへたるを作意としてよめり。我力をふかく入らずし

て我物がほにしたる心、別して嫌へる所也。雲のかけはしとだえせずといへる、夢のうきはしと絶してとおなじやうなる事ながら、「横雲」の哥は春のよの夢とつゞきたるゆへ末までうつくしく、これは吹わたる雲とはつゞかず、又と絶せずといへるは、と絶してと云やうにはなくきゝにくき詞也。それ故にや、句ごとにあしくきこゆる也。ちるかよしのも又きゝよからず。峰の桜木、木の字猶心きゝにくし。

〔付記〕なお判読に苦しむ箇所も少なからず残る。大方の指示教を賜れば幸いである。また、本稿は六名による共同研究の成果であるが、〔翻刻〕以外の箇所については代表して中村が担当した。

- (いはら はなえ・本学文学研究科修士課程)
- (おおやま かずや・本学文学研究科修士課程)
- (くまがい かずみ・本学文学研究科修士課程)
- (こばやし ゆういち・本学文学研究科修士課程)
- (やまだ さよこ・本学文学研究科修士課程)
- (なかむら たけし・本学非常勤講師)